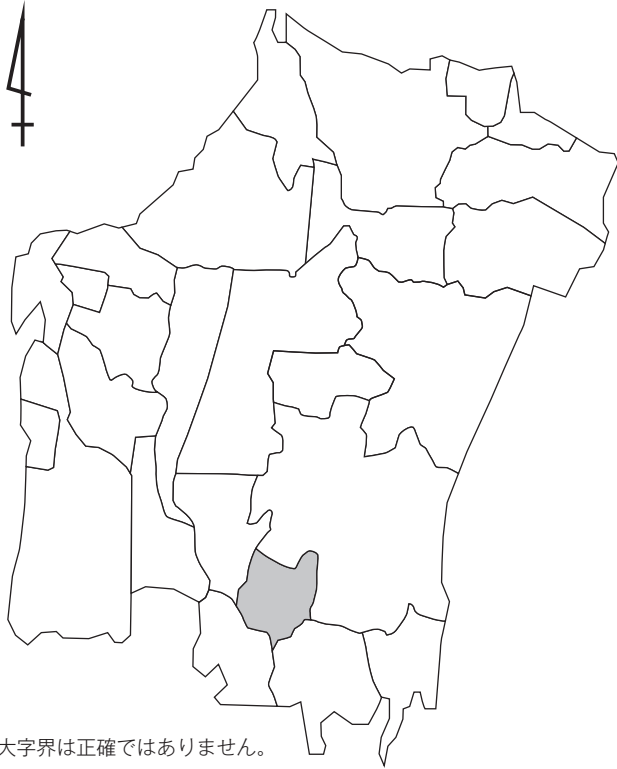


郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史 三村

三村は町の南部、田川左岸の低地と台地の上に位置しています。地区の東側には江川が南流しています。三村という村名は、元和6（1620）年の検地帳に記載がありません。村名の由来は、村の鎮守・星宮神社由緒によれば次のとおりです。かつては「下

三川村」と称していたが、いつの頃からか「下」と「川」を省略して「三村」と呼ぶようになったとのこと。江戸時代の初めは烏山藩領で、その後天領、旗本領となり明治維新を迎えました。天保年間（1830〜44）の家数は10戸です。また、小



※大字界は正確ではありません。

金井宿の助郷役を勤めました。

助郷とは、幕府の日光社参や大名の参勤交代で日光街道の交通量が増大した際に、宿場町へ近隣の村々が人馬を提携する労役のことです。これは農民にとっては大変な負担であり、見返りもあまりありませんでした。

この助郷制度が、慶応4（1868）年に三村で起こった「打毀」の一因となっていました。当時、三村にはある大変裕福な百姓がいましたが、助郷には一切人馬を提供せず、その分は他の皆が補っていました。また、その百姓は高利貸しも営んでおり、法外な金利が村人達を苦しめていました。

そうした要因が相まって、坂上村・三王山村の村人数百名が百姓宅へ押し寄せて家屋・家財を打ち壊す「打毀」といわれる事件へと発展したのです。この事件は県知事への訴訟にまで発展しましたが、最終的には坂上村と三王山村の代表が詫状を書き、示談となったそうです。



塚があったとされる字和尚塚の地

さて、三村にはもうひとつある出来事が伝わっています。それはとても悲しいお話です。その昔、三村には地藏堂（現在の星宮神社近辺）がありました。ある晩、本尊の地藏菩薩が何者かに盗み出されてしまいました。翌日、これに気付いた和尚は嘆き悲しみました。そして、その責任を取るために命を捧げる決心をします。その方法とは、塚を築いてその中に入り、食を絶ってお経を上げ続けることでした。これを村人達は止め

ましたが、和尚の決意は変わっていませんでした。村人達は仕方なく塚を築き、和尚が入った後に泣く泣く入口を塞ぎました。それから毎日、村中に鈴の音と読経が響き渡りました。しかし、いつしかそれも聞こえなくなったそうです。真面目な和尚を不憫に思った村人達は、この塚を和尚塚と名付けて供養しました。現在、塚は残っておらず、和尚塚の地名だけがその名残を遺っています。